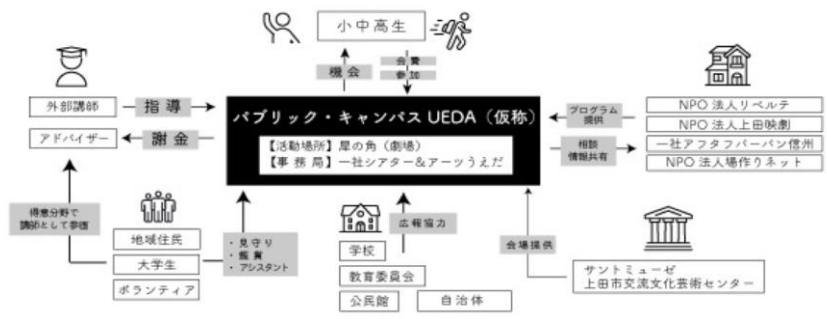
成果報告書

（地域文化倶楽部創設支援事業）

一般社団法人シアター＆アーツうえだ

所在地	長野県上田市	**設立年**	2016年
運営主体	一般社団法人シアター＆アーツうえだ		
事業目標	長野県東信地域の小学生から大学生が、自身の自発性に基づいて文化芸術活動に参加し、年代や障がいの有無によらず相互に創造性、社会性を育んでいくことができる場を創設すること。地域住民が主体的に関わりながら、こどもたちが安心して活動できる居場所づくり、質の高い文化芸術との継続的な関わりの提供等を通して、個々人に分断した地域社会のつなぎ直し、次世代の文化の担い手を育成することを目標とする。		
きっかけ	実施地域である上田市では教員の働き方改革で学校部活動の時間は減少、地域に代替の受け皿がないことから、放課後の居場所が不足していた。加えて養護学級、外国籍児童等、支援が必要となる子どもの放課後の文化活動の場は凡そ未整備のままである。また、部活動で大会に参加したり結果が優先されることにより芸術文化を通じて多様な価値観を経験し、自ら感性を育む機会が損なわれ学校を囲む地域で多世代・他者に子どもの創造性や潜在能力が共有される機会が減じている。子どもが質の高い文化に触れ、創造・発表を地域における相互コミュニケーションの機会と捉えて、世代や障がいの有無によらない開かれた「関わり合い」の「場」＝公共空間を整えていく必要があるという課題から発足した。		
団体・組織等の連携	 中心となる活動は「パブリック・キャンパスUEDA」改め「うえだイロイロ倶楽部」となる。近隣のNPO法人などがファシリテーターとして参加したり、運営についての相談・連絡等密に関わり活動した。また、ボランティアの多くは地域の大学生が参加した。		
活動場所	犀の角、グランピア、海野町商店街		
活動概要	週に一回、ファシリテーターやコーディネーター、ボランティアとともに5、6種類の部活から自身の興味関心によってその日ごとに選択し、活動する。活動の種類は演劇、美術、音楽、ダンス、実験、地域探索、ボードゲーム、映像など。参加者の意思・希望で新しい部活を創設することも可能。毎回、活動の最後の時間で発表の時間を設け、それぞれの部活がどんなことをしたか、作ったものなどを他の参加者と共有した。子どもが自分自身の意思で活動を選択することにより、能動的、自発的な参加となり、発表の時間を設けた事により毎回の活動の目標が出来、モチベーションアップに繋がった。第一線で活躍するアーティストを招聘する「スペシャルデイ」を3回開催。質の高い技術や、アーティストの人柄を身近で体感する機会となった。		

〇本事業による成果

従来の活動の成果のみではなく、本事業を実施したことにより得られた成果について記載すること。（数値やグラフで示すものがあれば望ましい）

・応募段階で、部活動が始まる以前の小学校低学年が圧倒的に多く、この年代の子どもたちが放課後に過ごす居場所や受け皿が地域社会に足りないことが明かになった。主な活動は低学年を中心に組み立ていくこととなった。これにより今までなかった小学生低学年が文化的な活動をする場を地域社会に創り出すことができた。（参加者の年代／1年生：8名、2年生：4名、3年生：3名、4年生：7名、5年生：2名、6年生：2名、中高生：3名）
・当初の想定より主な対象年齢が低くなったために、想定していた、特定の分野の文化活動を専門性の高いファシリテーターと共に深めていくような活動は思うように展開できなかったが、試行錯誤の末、子どもたちから自発的に興味や関心のあることからオリジナルの部活動を創作するまでに至った。
・学校と自宅の往復になりがちなこども（と保護者）に対して、アーティストや地域のユニークな大人と子どもが出会う場を提供することができた。
・知的障がいや自閉症など障がいがあると申し出があった児童・生徒は5名ほど、またバイリンガル環境にある児童が1名いた。ボランティアを手厚く配置するなどして、障がいがある子も、バイリンガルの子も、また、異年齢の子も部活ごとに一緒に活動をするように導いた。子どもは葛藤しながらもお互いを受け入れることを学んでいった。
・保護者からは「自分のやりたい活動を個々のペースで進められる」、「関わる大人が『指導』するのではなく子どもたちの『サポート』をする体制で見守っている」、「既存の学校でのクラブ活動では得られない多様な経験が積める」などの好意的な意見をもらっている。学校ではできない、民間複合文化施設とそこに紐付く多様な人材によって、子どもたちがのびのびと自由な発想によって多様な活動を展開できる唯一無二の部活動を展開できた。
・この活動を継続することにより、今回関わった年代の子どもたちが成長した際、学校や社会や部活動から提示されること以外に自分達で生きる道を発見する行動が期待でき、学校の負担が減ることが想定される。
・小学校の低学年の子どもたちには宿題の多さが負担となっている。今回の参加者の中にも、この活動と宿題の両立が出来ず辞めていった子どもが複数人見られた。そのため、活動前に来られる子どもには宿題をする時間を取り、学校生活との両立を図れるようにした。他の参加者と一緒に活動の場で宿題をする事によって、違う年代の子どもたちが教え合える環境となった。
・今後、小学生以上の層にも参加しやすいよう環境を整える予定である。異年齢交流が図れることが魅力と感じているとの声も多く上がった。学校での部活動以外の選択肢として、今後継続していくには本活動の存在の認知を進めていくことが重要と考える。年度の途中からでも参加できるようにするなど、受け入れ体制を整えることも必要である。

〇児童・生徒への指導に関する工夫

指導を行う上で独自で工夫していることについて記載すること。

・本活動は、日常的に「創作する現場」である劇場（民間複合文化施設）を拠点とし、ファシリテーターやコーディネーターは舞台作品を作る環境に深く関わる俳優、舞台スタッフ、アーティスト等や、劇場を中心に集う地域のユニークな人材や、日頃から連携している地域の福祉法人等の人材などを多く起用した。学校教育は上意下達、あるいは一斉一律になりがちであり、そのことが多様化した社会と合致していないことから、学級崩壊などの問題が発生する一因となっていると考えられる。そこで本活動は多種多様な人材が集まり、日々創作している現場＝劇場の利点を活かして、自発的で能動的な文化活動を目指した。
・指導者からは極力、課題ややるべきことを提示しない環境を作った。子どもたちの活動の様子をみながら、ファシリテーターが子どもたちのやりたいことや興味関心を引き出し、オリジナルな部活動を創作していった。劇場の観点から言えば、本部活動自体が、子どもとファシリテーター、コーディネーターによる共同創作作品である。
・保護者からも「『自分でやりたいことができる環境』が子どもの成長にとっても、良い影響を与えている」との意見をもらった。強制されることのない時空間で過ごすことが、子どもたちへ安心感や、居心地の良さを提供できている。
・部活ごとに活動日や活動場所を分けるのではなく全員が同じ日に、同じ施設内で、同時多発的に複数の活動を行った。参加者がそれぞれの部活動を自由に回遊できるようにし、多様な文化活動を自分の興味関心に応じて体験できるようにコーディネートした。
・毎回の活動の最後に、その日を振り返る時間帯を設けた。低学年の子どもたちは「日常ではない空間」に興奮した状態から、活動を振り返る事によりクールダウンし、解散する際には落ち着いて保護者と合流し、帰宅できるようになった。
・関係者に対し、上小県域基幹相談支援センターの障がい者支援センター児童担当の方に障がい児のケアについての研修を行った。
・「スペシャルデイ」で招聘する特別講師など、第一線で活躍するアーティストとの交流は参加者の大きなモチベーションとなっていた。
本活動が新たなクラブ活動の形を模索し、個性的な活動を創作することができた大きな要因であったと考えられる。

〇運営上の工夫

運営上、工夫している点を記載する。

・活動拠点である劇場は様々なアーティストや表現者が全国から集まる。地域で活動する人材に限らず、コーディネーターが劇場に集まるアーティストに声をかけ、その都度、活動に招聘した。
・通常活動は週に一回、放課後の時間帯である17時から19時とし、原則親が送迎することとし、遠方からも参加できるように設定。その他、発足された部活ごとに月一回程度休日などに2時間程、課外活動を行う機会を取り、通常活動中には訪問できない施設へリサーチに行くなどした。
・参加対象を「6歳から18歳以下」と表記し、不登校や引きこもり、フリースクールへ通う子どもも参加しやすいように配慮した。
・参加者の募集について、教育委員会へ協力を要請し、市内の小中学校へチラシの全校配布を行った。助成金の確定時期の関係から4月に募集開始することが難しく、多くの生徒はすでに部活を決定した後だった。交付決定時期が早ければ、応募がさらに集まると思われるが、今後、締め切り後の途中参加が叶う方法や、4月から募集の告知をする方法を考える必要がある。
・保護者との連絡はEメールに限った。活動に関しての業務連絡のみしか出来なかったため、今後はSNSや定期的な活動内容の報告など子どもたちの様子を伝えていきたい。
・活動後は、ファシリテーター、ボランティアとして参加する地域の方との振り返り会を必須で行った。全員が発言し、その日の子どもたちの様子の情報交換をしたうえで、問題点を出し合い改善すべき点を議論した。
・ファシリテーターやボランティアの人材育成に関しては、第一線で活動するアーティストを招聘するスペシャルデイを見学出来るようにしたり、活動拠点である劇場の公演を無料招待したりするなど、質の高い文化活動に触れる機会を作った。ボランティアとして参加する学生は社会福祉系の学部の所属が多く、多様な子どもたちの集まる場は講義で学んだことを実践する場となっていた。
・近隣のコワーキングスペースを利用する、ARに関する業務を行う企業と協働する計画があったが、実働には至らなかった。今後、実現を目標として話し合いを進める予定である。ファシリテーターは地域のNPO法人から多数起用するなど、連携している。参加者の作った「魚釣りゲーム」を地域のイベントに出店するなど、地域との連携も図れた。
・美術の部活動を行う上で、必要な素材はアート活動を行う地域のNPO法人から障がいを持った方が作る色画用紙など素材を調達した。運営側が用意したものだけではなく、子どもたち自身が必要と思う素材を自宅や野外から探して持ち寄った。活動拠点となる施設内に保管場所を決め、参加者が自分で準備・片付けが出来るようにした。
・運営の連絡ツールとして、SNSを使用した。また、保護者へ活動写真を共有するのにウェブ上の媒体を利用した。
・年間を通しての活動が運営側の負担となってしまった。今後の活動は時期を限っての活動を考えている。連日の活動ではなく、週に一回とし、隔月で休みを設けるなど、参加者には負担がないようにした。ボランティアは各自、参加できるタイミングのみ来てもらうようにし、無理がないように心がけた。

〇継続的な運営に関する課題・展望

活動場所、指導者、活動経費、教育機関や地域等との連携等、様々な観点からの課題と展望を記載する。

・地域社会で子どもの文化活動を受け入れることについてのニーズは相当なものがあると今年の活動を通して実感した。当施設の本活動だけでは受け入れ切れるものではない。今後、映画館、図書館、公民館、美術館など官民問わず多くの文化施設や関係機関と連携して、子どもが放課後に文化活動に参加できる場所を地域に増やしていくためネットワークを構築し、同様の事業を複数の場所で展開していく必要がある。
・今年度の活動は初年度ということもあり、募集段階で広く告知が行き届いたとは言えない状態であった。
・学校でのクラブ活動が始まっていない層のニーズが強く、小学校低学年が多く集まった。一方で、年度始めで数人参加していた中高生は、低学年の参加者が多いことから自分の望む活動ができないという理由から早い段階でやめてしまった生徒が複数見られた。異年齢交流できることがメリットとなった反面、年齢層で別れて活動できる環境があった方が良いということも分かった。また、現状で小学生以上の年代へのアプローチを考える必要がある。
・人材確保に関して、近隣の大学のボランティアグループや、関連するゼミなどに協力の呼びかけを行なったり、民間の人材募集プラットフォームを利用したりすることによって人材はある程度確保することが出来たが、今年の予算組みでは、ボランティアの交通費の支払いが出来なかった。今後、交通費程度の支給は出来るよう計画したいが、実現のために補助金の増額が必要と考える。
・謝金に関して、本活動のように画一的ではない、新しい取り組みを進めていくためには、コーディネーターの支払いが予算内で補えないという課題がある。活動前後のファシリテーターとの打ち合わせや終了後の関係者の振り返り会など、本活動の根幹を左右する重要な時間に全ては謝金が当てられない状況である。予算組の改善や、そのための財源確保の方法を検討するとともに、補助金の増額の検討を要望したい。
・参加者から徴収した会費や月謝に関して、募集段階で会費や月謝の徴収の旨を明記し理解は得られていたが、その費用の捻出が厳しい層などはその時点で参加を諦めてしまった可能性がある。今後、月謝の免除制度などを検討する等、ケアは必要と考える。
・実施団体が民間の複合文化施設であるため、地域の芸術団体や福祉団体とは強い結び付きがある。参加団体として一社アフタフ・バーバン信州や、NPO法人リベルテ、NPO法人上田映劇などがある。さらに活動の拠点を増やし、地域全体でこの活動を支えられるような構図を目指したい。
・自治体等の補助金制度、民間の基金などは活用していないが、今後活動を継続していくにあたって、検討の機会を設ける予定である。
・地域との結びつきが強く持てたことは評価すべき点であるが、多方、学校や教育委員会との繋がりが弱かった。

上記の課題をどのように解決し取り組んでいくのか、方針や計画を記載する。

・地域との結びつきを強化し、文化施設や関係機関との連絡会議や視察などを複数回実施する。特に、コーディネーターが地域社会のさまざまな文化施設や関係機関同士を、またそこの人材同士を繋ぐことにより、子どもが過ごせる場所や人材のネットワークを作り、特に高学年、中高生が地域のさまざまな拠点で放課後を過ごせるように働きかけていく。
・募集告知に関して、年度始めに幅広い年代、地域に情報が行き届くよう、更に告知を強くする。また、今年度の助成金の交付より早い段階で決定されるとより、広く応募が集まると考えられる。
・自治体の補助金制度、民間資金の活用に向けて、積極的な情報収集と情報発信を行う。
・今年度、教育委員会の生涯学習課から協力の申し出があったこともあり、来年度以降はこちらから学校機関へアプローチするのはもとより、教員や、学校関係者に本活動を見学してもらい意見交換などを行う機会を設けることを計画する。加えて、財源確保も今後の課題となっていく。自治体への協力を求めるなど、根本的な解決を議論し、計画を立ててゆく

※上記4点の記載の中に活動の画像を挿入してもよい。

※『地域移行（展開）を進める際のポイントチェックリスト』を参照すること。

参加者 （予定人数）	小学校1年性～中学校3年生　29人
募集方法	教育委員会に協力を要請し、市内小中学校にチラシの全校配布を実施、高校へは直接持ち込みチラシを配布、SNS等で告知
指導者	地域住民の中から、クラブ活動の進行を導く専門性をもったファシリテーターを起用。活動拠点となる劇場のこれまでの活動で協働してきた専門性の高い人材を外部講師や指導者として全国から起用。
移動手段	保護者による送迎、徒歩
活動費用	会費2,000円、月謝1,500円
スケジュール	5月：募集開始、オリエンテーション6月：おためしワークショップ、通常活動開始7月通常活動8月：感染レベル悪化のため活動休止9月：感染レベル悪化のため活動休止10月：通常活動再開、スペシャルデイ、オープンデイ①11月：通常活動、スペシャルデイ②③12月：通常活動1月：オープンデイ、通常活動2月：感染レベル悪化のため活動休止
保険加入等	レクリエーション保険など　参加者、ファシリテーター、ボランティア、コーディネーター全員が対象

※文化庁ホームページ：地域文化倶楽部（仮称）の創設に向けた検討会議　事例集を参照

掲載URL

（https://www.bunka.go.jp/shinsei_boshu/kobo/pdf/92801101_09.pdf）

【活動の様子（写真添付）】